
Muv-Luv experience

月と太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v e x p e r i e n c e

【Nコード】

N 2 8 9 9 Y

【作者名】

月と太陽

【あらすじ】

大学四年生の冬。

自らの身の振り方を未だに決められず人生をどうするか悩んでいた。将来への不安、学生気分の終了。

様々な重圧がのしかかってくる時期。

大学院へ進学するか、就職か。

人生の帰路に立たされた彼は、叔父の経営する学校への教育実習を勧められまあ寄り道も悪くないかと思うのであった……。

M u v - L u v e x p e r i e n c e 第一話 前編

見渡す限りの全ては黒炎に支配されていた。

鮮やかなる夕焼けに染まった赤に滲んだ赤色が混ざって見えた。

そこは見るからに市街地であつた面影がある。

ボロボロに荒廃しようとも面影までは無くす事は不可能であつた。
人々が日常の営みを送っていたであろう極普通の街であつた。

いまや一つの人影も見当たらず、瓦礫の山と黒煙が無常に佇んでいるのみ。

M u v - L u v e x p e r i e n c e

第一話 前編

見覚えなどない、知らない景色だなあとぼんやり取り留めのない
事を思ったりしていた。

現状を整理しようとしても頭が一切働かない、まるで自分の脳みそがグチヨグチヨにシェイクされてしまったかのようだ。

それにしてもなんだか随分と高いところから見下ろしているみたいだ、なんて、見慣れた自らの背の高さからの風景とは全く別物に感じていた。

未だ睡魔から覚醒を果たしていない眼をしばたたくせる。

俺は一体全体何処で力付き寝ちまったのか。

（——昨日は宴会が終わった後どうしたんだっけか？ ああっと、確かタクシー捕まえて家まで帰ってから……）

「——全く、思い出せん……」

ベランダでも寝ちまったのか、俺。

にしては肌寒くない、この季節、夜間の外は極寒だし。

うーんと唸り声を上げながら、手を組んで天高く突き上げる。腕からだけじゃなく背中からもバキバキと鳴った。

筋肉こつてんなあ、あー無理な体制で寝てたのかね……。

暫しの間、簡単なストレッチをした後、後ろにあった背もたれに勢い良く乗りかかった。……ん？背もたれ？

「——っあえ？」

抜け落ちていた現実感が戻ってくる。耳に入る無機質な機械音と断続的な地響き。

『CPから各部隊に伝達！ 別働隊のBETA群は地下を移動し進行中だった模様！ 再度武装と配置の確認を求む！』

（あ？ 何だつて？）

……可笑しいぞ。何処だ此処？

——コックピット？

瞬間、思考が停止した。

もしやゲームの筐体にでも乗ったまま惰眠を貪ってたのか……。もういい大人が……恥ずかしすぎるだろうが。

『ラウンド大隊全機に伝達！ 全員聞いていたな！ 愛しの恋人達がお出でになるぞ！ 残弾及び燃料を確認しておけ！ 各機前線を維持し展開。その後各機の判断に任せ【化物共】に仕掛ける！』

隊長らしき壮年の男が突如眼前に出現し、喋り始める。それに追隨して何もない空間から何十個ものモニターが並び出した。

『『『『『了解！』』』』』

（……おいおい、ノリノリだなあコイツらあ。 いい歳こいて戦争ごっこかよ）

二日酔いの行為症かズキズキ痛む頭を摩りながら苦笑を浮かべてた。

……にしてもスゲーリアルなコックピットだな、空中にモニター出現したよおい。

ゲーセンの箱物筐体っていやあ確かバルジャーノンだよな。あれってこんなに本格的だったけか？

しかも物凄くハイテクチックな仕様ばいし結構な金掛かってんだろうなあ。

……まあ随分ゲーセンやらの娯楽とは遠ざかっていたしなあ、最近の技術の進歩ってやつは一概に馬鹿にできんし……。

『——佐藤大尉！ 返信が無かった様だがどうかしたか？』

(……おう、先刻の隊長っぽい人に声掛けられた。うーん一応ノリを合わせないと失礼だよなあ多分)

『——いえ、隊長！ 此方は問題有りません』

『そうか。了解した——貴官には期待しているぞ』

ノイズ混じりの無線が途絶え眼前に映っていた画面ウィンドが同時に消失した。

(はあー、マジですげえな。最近のゲーセンって)

おおかた酔っ払ってゲーセンに迷い込んだのであろうか？
にしても何故バルジャーノンか……高校時代はよく入り浸ってい

たしなあ。昔の習性かねえ。

欠伸を二度繰り返し、何となく今自分が置かれている状況を理解し始めていたりした。

（えーと多分コレが機体本体の操作用でコレが武器のトリガーっと）

——スラスラと難なく機体の操作方法が頭に浮かんでくる。

どことなく違和感を感じなくも無いがきつと昔の記憶が蘇っているんだと納得しとこう。

昔遊んだ型遅れのバルジャーノンに近い構造で流石に基本的な操作方法までは一新されてないみたいで助かった。

『——大隊全機傾注！……箱舟は無事飛び去った。我らの任務は遂行されたも同然である。残すはバビロン作戦のみだ』

恐らくチーム戦の前哨戦があつたらしい。

良く周りの機体を見渡すと全体的に装甲や部位が破損しているモノが多い。

持久戦とかなのだろうか？

『——貴官らは地球を救いし英雄として語り継がれるであろう。いいか最後の命令だ。——必ず生きて帰還するぞ』

——俄に地鳴りが激しくなる。一段と決定的に。

今しがたまで瓦礫しか一望できなかった地平線が徐々に歪に蜂起していく。

その様は黒い津波が押し寄せているようだった。

——ここは海上では決して無い、然らば海が見渡せる浜辺でも無かった。

「……おいおい懐かしの青春の１ページが間違つてなきゃ、バルジヤーノンって対人ゲーじゃ無かつたか……」

彼は知る由もない、コレがゲームの範疇に当てはまる事など永遠に訪れはしないと。

『——つ総員、突撃iiiiiiiiiiii! ! ! !』

一切の乱れの無かつた隊列から一機また一機と黒い津波を目掛けて我先にと駆けていく。

——補給は十分では無い。

拠点防衛を主に戦闘を繰り広げ、予備の弾倉も使い切っていた機体が大半を占めていた。

退路は途絶えまさに背水の陣であつたのだ。

答えは近接戦闘だ。

残された武装を使い生き残るのならば突撃しか無かつた。

「……っと不味いよな、一人だけ静観なんて。期待取りに空気を読むか……。んじゃまーいっちょ行きますか!」

ペダルを思い切り踏み込み跳躍ユニットを最大点火、瞬時のうちに視界に映る映像が次々と加速度的に後方に流れていく。

「つつおおおお!!!」

機体制御などのお構いなしの変態加速は相乗的にコックピット内に掛かるGも増大させていた。

(こ、こんな所も無駄にリアルなのねえええ)

—— 本来対BETA戦での戦場では飛行は恙なく死に直結するモノである。

原因は光線級といわれるレーザー属種、高度1万mの標的に対し有効射程距離は30?。

決して味方誤射はしない。

正確無比な射撃に人類の叡智の結晶たる戦術機も敵いはしなかったのである。

辛くも運は味方をした。

幸運にも現在の戦域には光線級は存在をしてはいなかったのである。

高速噴射跳躍を繰り返しながら黒く染まった津波に近づくにつれ、その正体が図らずとも視認できていく。

—— それは【化物】であった。

折り重なりながら我先にと進む姿は餌に群がるようで、意志がな

い人形の様に見えながら生々しい造形がそれを打ち消していた。

歪な形をした奇形生物。人間が見て生理的に受け付けられない物体。

彼は——佐藤大和は——コレの正式名称を知らなかった。

だから【化物】としか表現出来なかったが、それは人類が皆抱く正常な認識でもあった。

異星起源種。

BETA:Beings of the Extra Terr
estrial origin which is Advers
ary of human race——『人類に敵対的な地球
外起源生命』

それがコレの【化物】の正体である。

「——つ気持ち悪いんだよおお！！ 化物があ！」

理由なく震えだした指を無理やり押さえ付け、トリガーを引き絞った。自らに今一度摺りこませる。認識を。コレはゲームなのだと——。

撃鉄は落とされた。

機械の金切り声を上げて87式突撃砲の砲身を伝い劣化ウラン弾は前方に鎮座する【化物】目掛けて余すことなく叩きつけられていく――。

M u v - L u v e x p e r i e n c e 第一話 後編

M u v - L u v e x p e r i e n c e

第一話 後編

せわしなく視線を全周に巡らせながら、大きく息を吐き出す。

不気味な化物共との交戦も漸く一段落ついた頃だった。

何度が危ない場面があったがその尽くは直感的に判断し肉片に変えていった。

例えば蟹の化物は後方から出ていた顔らしき部分を徹底的に狙い撃ちし、甲羅を被ったような化物はから空きである背後からの攻撃に終始して戦闘を重ねていくうちに同時に戦術を構築していった。

他にも多々小型の化物が襲いかかってきたが遠距離からの掃討を念頭に置きながら距離を取り纏めてあしらっていた。

——この殆どは対BETA戦に於ける基本指針である。

要撃級の尾節に当たる顔は感覚器を成しており、此处を破損した要撃級は戦術機の正確な位置を知るすが失われる事になる。

突撃級も全面に展開する装甲殻は現存するBETAの内です最大の防御力を誇る。しかし反面突撃しか攻撃方法が無いため機動制御能力、特に旋回能力が低い。結果これを打ち倒すのならば背後に回りこみから空きの背への攻撃が常套手段となる。

小型種への対応も言わずもがな、近距離でやりあったのならば手こずるのは必至であるが遠距離からの面制圧が効果的である。

とはいえ安堵の息を吐いてばかりでもいられない状況だ。

故意では無いにしろ遭遇したほぼ全ての敵を弾薬を消費する攻撃方法とってしまった。

——現在残弾総数はおおよそ戦闘開始時と同じ数を安全に遠距離で相手にするほどの余裕はあるはずがなかった。

「はあ、はあ、はあ……」

体の疲労も限界が近い。

たかがゲームの遊びだと楽に鷹を括っていたのが地味に効いていた。

体への負担を一切考慮せず跳躍ユニットを使用し縦横無尽に駆け巡りすぎた。

無論その分の推進剤も使いきってしまった。

額に滲んだ汗が頬を伝い滴り落ちていく。

——休んではかりではられない。
今この時さえ敵は己の周囲をとり囲んでいるかもしれないのだから。

(……はっ、何ムキになってんだか……)

そう所詮は唯のゲームである。
疲れたのならさっさと辞めてしまえばいいだけだ。
そう止めてしまえば……。

(——くそっ、何で途中で切り上げらんねえんだよ)

コックピットを見渡しても何処にもそれらしきボタンが見当たらなかったのだ。

ならば無理やり強制的にコックピットをこじ開けて降りればいいじゃないか——それは取り返しが付かない気がしてどうしても躊躇してしまう。

人間としての本能がそれだけは絶対に止めると耳元で囁いているのがハッキリと聞こえているのが分かる。

すると残される最後の手段。

ゲームクリアか。

ゲームオーバーか、のどちらかの二択。

「——!？」

突如唐突にコックピット内にけたたましいアラーム音が鳴り響く、網膜投影には赤い矢印で右方向からの敵の接近を告げていた。

素早く近接戦闘に移らなくてはいけない……。

一瞬の軽巡の後、片手に突撃砲を持ち替え残った右腕で前腕部のナイフシースから65式近接戦闘短刀を取り出す。

「——っおおおらあああああああ……!!」

この間約三秒、数時間に体験した戦闘経験を生かし積極的に近距離武装を使用した。

——比較的凡庸性に優れる長刀では無く範囲の短い短刀を選択したのは、愚行に当てはまらなかった

——直感したのだ。

勘という物は決して馬鹿に出来ない存在であると彼は短い人生の中でその恩恵を授かってきた。

昔から人の考えを読むのが得意だった、餓鬼ながら人を見下していた時期があった。

本能的に知覚する事に秀でた人間は確実に在ずる。

それが彼——佐藤大和は普通の人間より少しばかり秀でていたのだ。

しかして予知する事柄は外れる事は無かった。

下半身のバランスを保ちながら絶妙に上半身のみを横に回転させた瞬間、視界に入ったのは戦闘中何度か見かけた赤い蜘蛛の造形をした化物、戦車級であった。

口元に嘲りの嘲笑を浮かべているかのような赤蜘蛛は周囲に散乱していた要撃級の死骸を足場にして個体では実現不可能な跳躍を成し遂げていた。

——異様な落ち着きを抱きながら冷静に推察できたのは視界一杯に広がる戦車級がとて滑稽に見えたからだ。

戦車級は腹部の口を大きく開け放ち今か今かと獲物が食いちぎれる瞬間を待ち得ていただろう。

だが残念だ、空中を浮遊していたら——逃げ場は無いだろう？

意趣返しに口元を三日月に歪め、一切の戸惑いをせず勢い良く短刀で赤蜘蛛の胴体を横払いに斬りつけた。

静止していた化物は綺麗に真つ二つにされながら濁った体液をまき散らし化物の残骸が横たわる地面を転がっていった。

「——つくそがあ！ この茶番はいつになったら終わんだよ！」

きつく拳を握り感情のまま乱暴に振り下ろした。

——コックピットの中は静まり返り機械音が鳴り響く。

随分前から酔いは覚めていた。現実感が伴っているのが嫌にでも分かってしまうのが恐ろしく、思考を停止させて余計な事は考える事をやめていたのだ。

——時は満ちたよ。

「——っ……何だアレ？」

——さあ。幕を上げましょう？

2001年 12月1日 午前6時 日本 神奈川県横浜市柵町
高層マンション1129号室

「——あ……夢、か」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2899y/>

Muv-Luv experience

2011年11月7日21時49分発行